
追 悼

東浦將夫氏の他界を悼む

—その足跡を追いつながら—

元国立防災科学技術センター新庄支所長 中村 勉

地下水と雪氷の間に立って、長らく研究と研究環境づくり、更に学生の教育や大学運営に尽力された東浦將夫さんが他界された。平成 22 年 (2010 年) 2 月 24 日のことである。病名は特発性間質性肺炎という難病であった。昭和 16 年 11 月 24 日のお生まれなので、丁度 68 歳と 3 か月という若さであった。平成 21 年 10 月までは山形県酒田市にある東北公益文化大学と大学院で (大学院のキャンパスは鶴岡市) 教鞭をとっておられた。平成 18 年 8 月神奈川県立循環器呼吸器病センターで上記の病であると診断された。平成 21 年 8 月には山形大学病院へ、同 22 年 1 月には、ご自宅のある山形県立新庄病院に転院し、ご家族に支えられながら病魔と闘っておられたが、帰らぬ人となってしまった。もう少し活躍して戴きたいお方だったので、誠に残念である。若くして、都会を離れ、東北の豪雪地、新庄に根つき、豪雪地帯の克雪対策研究を始めとして、雪国の発展に一生その身を捧げられた東浦氏の意気込みを思うとき、少しでも、その足跡に触れることで、僅かでも、同氏の霊を慰めたいと思う。

東浦さんは、横浜生まれの横浜育ちである。昭和 35 年、神奈川県立横浜緑ヶ丘高校卒業後、当初の目標どおり、昭和 37 年には東京教育大学理学部入学、41 年同学部地学科卒業。卒業研究テーマは、「菅平における湧水の水文学的研究」であった。指導教官は山本莊毅先生であり、卒業後はそのまま同大学院理学研究科地理学専攻修士課程を修了され (降雨の地下水位に及ぼす影響)、博士課程に進まれた (昭和 43 年)。しかし、その頃は、大学紛争時代 (1968-1970) の真っただ中で、研究は殆どできなかったという (東浦, 1996)。

そんな折、昭和 44 年 10 月の国立防災科学技術センター新庄支所開設にあわせた研究員の募集が



図 1 東浦將夫氏 (1941-2010)

あることを、山本先生から紹介され、面接試験を受け、同年 6 月、同センター第 1 研究部災害研究室へ研究員として採用された。当時、センターは歌舞伎座のすぐ近くの、東銀座の仮の館であったが、東浦氏は、そこで、支所開設までの諸準備に忙殺された。すなわち、支所の研究施設等の図面引き・測定機器の下調べ・雪氷に関する知識の吸収、8 月には、長岡の雪害実験研究所訪問、開所と同時に同僚となる中村秀臣氏 (当時北見工業大学) との初顔合わせ、斎藤博英所長他の諸氏との対面、直ぐの冬に始まる観測に備えるべく水温計の検定・測定測器の設置・野外実験研究方法の取得、帰京後は早速の機器の発注、事務官到着までの一般的事務処理のための 3 日間にわたる特訓等に忙殺された。27 歳時である (東浦, 1984a)。

10 月 1 日の支所開設日に新庄市へ移り住まわれた。開設とはいえ庁舎も無く新庄農業水利事務所 (馬場町) の奥の間の、畳が取り外された板敷きの間が仮庁舎であった。45 年 1 月の坂野行雄支所長の、5 月下旬の田中孝三係長の赴任と共に事務の仕事からは解放され、調査研究の方へ力が振り向けられていった (東浦, 1984a)。

新庄支所設立の意義(新庄支所要覧他, 1969)は、その要旨を纏めると、次のようになる。「大規模野外実験による、消除雪技術の開発、ならびに、各省庁との協力のもとに雪害発現機構を科学的に究明することを目的とした国立の試験研究機関の拡充強化」の一環である。

当時の大学人、特に、基礎系の人間には目的を冠せられた研究への従事には、強い抵抗感があったに違いないが、この趣旨に沿った研究課題が待ち受けていた。雪害防災研究室の研究員として、東浦氏が当初担当した課題に、屋根雪処理技術の研究(東浦, 1972)や流雪溝の流水機能に関する工学的研究があった。屋根雪処理技術の研究の内、散水による研究は低温室でも行われた。風力利用の研究は野外に実験小屋を設け、その棟部分に送風機を付けたもので行われたと理解している。筆者が昭和49年(1974年)10月に新庄支所に着任した時、その実験施設は、まだ使用できた。筆者は、後年、1980年2月、カナダのNRCで、風力利用の軌条上の除排雪研究のデモンストレーションを見せて貰ったことがあるが、東浦氏が研究に取り組んだのが、若干早かったかもしれない。流雪溝の流水機能に関する研究は、支所構内に設置した実規模大の流量・勾配・溝幅可変流雪溝実験施設を用いて精力的に進められた(Higashiura, 1983; 東浦, 1984b, 1986)。東浦氏が担当した研究の他に、中村秀臣氏が担当した地下水散布による路上降積雪の除去研究、いわゆる、道路の散水消雪実験にも地下水は必要であった。これらの研究用に鑿井された井戸を観測井とし地下水の調査研究が始められた。センター採用面接試験時に意思表示した「新庄盆地の地下水の研究」がここに開始されることとなった。しかし、当初は地下水研究用の時間も研究費もなかった。ウィークデイは、課せられた研究課題で手一杯だったので、地下水観測は土日・祭日、あるいは、朝5時起きで時間を捻出されたという。研究費の方は、幸いに文部省の科学研究費による研究グループに加えて貰うことが出来、浅層地下水自動観測点3か所と消雪用深井戸の定期的人手観測点3か所を市街地に選定し、新庄盆地を野外フィールドにする準備が出来た(東浦, 1996)。博士論文は大学時に考えていたものとは別に、現地のできる研究を新たに

考えられ、昭和51年に「新庄盆地の地下水の水文学的研究(英文)」で結実した(東浦, 1996)。この前年には、「新庄盆地の水収支」が発表されている(東浦, 1975)。昭和53(1978)年4月には、主任研究官となられた。1980年代には「多雪都市における雪処理用陸水の研究」として内容の濃い論文がいくつか発表されている(Higashiura, 1983; Higashiura, 1985; 東浦ほか, 1987)。研究課題に見られるように、雪と地下水との双方にまたがった境界領域の幅広い研究で、そこに、東浦さんのユニークさがみられる。いわゆる、56豪雪時には、沼野夏生氏を伴い、福井方面へ調査に行かれた。現地へ入って間もなく交通機関も途絶え、心配したが、野外調査には強い東浦氏ゆえ無事に帰ってくることを信じていた。しっかりとした調査を終えて、無事帰られた(東浦ほか, 1982)。ここまでの成果は、JICAで来日した研修生のための防災セミナーで講義された(Higashiura, 1982)。

主任研究官として、超多忙であり、研究一筋に突き進んできた東浦氏ではあったが、昭和60年4月に人生を変えるような大きい出来事に遭遇した。それは、当時の科学技術庁(現文部科学省)研究調整局生活科学技術課への出向である。併任人事であるから研究職のままではあるが、行政官としての仕事である。研究の中断である。東浦氏の上司職にあった筆者は、この出向には大反対であったが、強行されてしまった。東浦氏も悩まれたが、「行政の匂いのする研究者に成ってもいいか」とご自分を納得させられたようである(東浦, 1996)。

本庁1年、本所3カ月のお勤めを終えて昭和61年(1986年)に新庄支所へ戻られた東浦氏は、雪害防災第2研究室長として研究の現場に復帰された。しかし、ご本人は、これからは、研究推進の御世話役をするつもりと考えられたようである(東浦, 1996)。筆者は、昭和62年4月に新庄支所から長岡の研究所へ転動したので、東浦さんと同じ職場で働くことはそこで終了した。東浦さんは、私の後任として着任した故木村忠志氏を補佐しながら、昭和61年度に発足していた特別研究「地吹雪の発生機構の解明と災害防止技術の開発に関する研究」(防災科学技術研究所新庄雪氷防災研究支所編, 1993)、や、科学技術振興調整費による「融雪技術の高度化に関する研究」(5カ年計

画)、環境庁の公害研究「多雪地域における地下水の汚染機構…」(3カ年計画)などに研究者として、また、研究の推進者として活躍された。

1994年3月定年退官した木村支所長の後を継いで、新庄支所長となられた。支所長時代(平成6年4月1日～同9年4月30日)の大きなお仕事は、何といっても、降雪装置付きの大型低温実験施設の建造に違いない。この建造時のことは、ご本人により、「「雪氷防災実験棟」計画時の思い出」として記録されている(東浦, 1999)。建造のアイデアは阿部修氏であるが、東浦氏は阿部氏の着想を受け入れ、本庁出向時代の人脈を生かし大型予算を獲得され、見事に建設された。平成9年度から使用され始めた、この実験棟の使用実績は高い。研究は自体研究の他に共同研究がある。課題数でみると、平成9年から22年度までは、共同研究課題数267件、自体研究課題数114件である(22年度分のみ予定数を含む)。施設貸与は、平成15年度に始まり、22年度まで34件を数える。これらに、受託研究・施設利用を含めた総件数は417件に上る(新庄支所資料, 2010)。低温実験施設には降雪装置が備えられた大型低温室もあるが、年中フル活動で、休むのは定期点検時のみである。

平成9年5月1日には、長岡雪氷防災実験研究所長職に転じた。就任時には、「研究のマネジメントに徹します」と宣言された由(T研究員談)。平成13年3月31日までの3年11カ月、最後の国立研究機関の長として、所長職に徹せられた。退職日の翌4月1日からは独立法人となったので、長岡所長職の最後の数年間は、国立の研究機関から独立法人へと大きなかじ取り役で、人には言えない苦しみも味われたのではなからうか?

平成13年(2001年)4月からは同月開校の東北公益文科大学の教授として新しい大学創りのために一生懸命ご活躍されたようである。東浦氏が大学へ勤務された後、初めて会ったときに、「学生部長を仰せつかって大変です!」と言っておられたのが、印象的で、心に残っている。図1の写真は、平成17年(2005)の秋頃、ゼミの学生8人に囲まれた東浦さんを抽出したもので、他人を和ませるような、幸せそうなお顔つきである。闘病中、周囲の友人に「私はもう研究はできない身体だか

ら、妻を応援するよ」と漏らされ、奥様の修士課程修了に陰ながら助力しておられたご様子である。東浦氏は奥様の単位取得(同大学院)を見届けられた。

東浦さんは、物事の歴史的な捉え方が得意なお方だった。筆者は不得意とするところではあるが、東浦さんの人生は、5期に分けて考えられよう。すなわち、第1期;誕生から大学院生時代まで、第2期;27歳で就職され、研究一途の研究員(8年弱)・主任研究官(7年間)の時代、第3期;雪害防災第2研究室長(8年間)の時代、第4期;新庄支所長(3年11カ月)・長岡雪氷防災実験研究所長(3年11カ月)の時代、第5期;大学人としての時代(8年7カ月)の5期である。第3, 4期の東浦さんのご活躍を観るに、私には出来なかった研究グループの壁を破っての研究組織の拡大がある。

東浦氏は一生の間に2回も新しい組織の立ち上げに携わられたことになる。研究が大好きで、ご家庭もそっちのけで研究に没頭できたという時期もあり、他方、他の方々のために一生懸命に力を注がれた時期も持たれた。大学院生時代を含めると、43年7カ月にわたる研究と教育に携わられたことになる。

委員会活動も多岐にわたる。雪氷学会関係では、副会長職;1999-2000, 理事(事業委員);2001-2002, 東北支部: 理事;1994-1997, 2007-2008, 幹事;1991, 1992, 東北雪氷賞選考委員;2005-2006, 北信越支部理事;1999-総会時, 雪氷学会50周年記念事業委員会幹事, 同学会法人化委員会事務局東北支部代表等。水文水資源学会・日本雪工学会他、県等の各種委員会委員: 山形県;地下水審議会;1995-2001, 温泉審議会・利水計画委員会・自然環境保全審議会・環境影響評価審査会等。青森県・富山県・長岡市・新庄市・克雪技術研究協議会・最上地域・庄内地域に関する委員会等多数の委員会。

なお、この稿には、東浦さんの全ての論文が文献欄に引用されている訳ではない。

この稿を纏めるために、東浦氏に関する資料を探していたら、思いがけない資料がいくつか出てきた。一つは雪氷防災実験棟建造時の東浦氏ならびに本所のO企画課長と雪氷学会長の故東晃先生との間をとりもった、建設に関する要望文書作

成文言に関する連絡ファックスの数々である。私も実質的なお手伝いもさせて戴いていたことが判明した。私もそろそろ人生の後始末をせねばいけない年齢と考えている時であるが、図らずも東浦氏が手伝ってくれたようなものである。短い人生で貴兄という方と知り合い、ともに若かりし頃、同じ研究テーマのもとで一緒に楽しい時を持てたことに感謝しながら筆をおきたい。有難うございました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

(2010 年 7 月 20 日。於京都宇治市)

(この稿を纏めるに際し、東浦夫人をはじめ、結城広行・阿部 修・石坂雅昭・小林俊市・石田祐宣の諸氏ならびに雪氷学会事務局の助力を得ました。ここに記し感謝の意を表します)

文 献

- 東浦將夫 (1972) 地下水による消雪。水温の研究, **16**, 4, 10-17.
- 東浦將夫 (1975) 新庄盆地の水収支。地理学評論, **48**, 7, 490-496.
- 東浦將夫ほか (1982) 昭和 56 年豪雪による福井県・石川県の都市雪害に関する実態調査。昭和 56 年豪雪による北陸地方の災害現地調査報告書, 国立防災科学技術センター, 171-335 (本文), 367-388 (写真版).
- Higashiura, M. (1982) Snow Disaster Prevention-My Snow Studies- BOUSAI GIJYUTU SEMINAR TEXT, 6, 99-124.
- Higashiura, M. (1983) Special water-use for snow removal and snow melting and its feasibility in built-up areas of snowy cities in Japan. BEITRÄGE ZUR HYDROLOGIE, Sonderheft **3**, 317-332.
- 東浦將夫 (1984a) 支所の生い立ちの頃。防災科学技術。No. 53, 107-110.
- 東浦將夫 (1984b) 流雪溝の運搬能力に関する研究。防災科学技術, No. 53, 国立防災科学技術センター刊, 46-47.
- Higashiura, M. (1985) Feasibility Study of Inland Water for Snow Removal and Snow Melting in Built-Up Areas of Snowy Cities in JAPAN. BEITRÄGE ZUR HYDROLOGIE, Sonderheft, **5-2**, 667-683.
- 東浦將夫 (1986) 流雪溝。雪氷防災 (白亜書房), 179-193.
- 東浦將夫ほか (1987) 多雪都市における雪処理用陸水の研究。第 3 回水資源に関するシンポジウム論文集, 213-218.
- 防災科学技術研究所新庄雪氷防災研究支所編 (1993) 地吹雪の発生機構の解明と災害防止技術の開発に関する研究。防災科学技術研究所, 260pp.
- 東浦將夫 (1996) 東北雪氷賞 (学術賞) を受賞して。東北の雪と生活, 第 11 号, 98-99.
- 東浦將夫, 1999: 「雪氷防災実験棟」計画時の思い出。第 15 回雪氷防災研究発表会新庄雪氷防災研究支所開所 30 周年記念講演会報文集, 10-11.